

本土決戦・登戸研究所・中野学校

資料館館長 山田 朗（文学部教授）

はじめに

- [1] 2013年4月に開設された明治大学中野キャンパスは、かつての陸軍中野学校の跡地
- [2] 明治大学生田キャンパス（川崎市多摩区）は、かつての陸軍登戸研究所の跡地
- [3] 両者を結ぶキーワード：〈秘密戦〉
〈秘密戦〉のためのヒトづくり＝中野学校、〈秘密戦〉のためのモノづくり＝登戸研究所
- [4] 本土決戦における両者の関係・役割を探る

I 〈秘密戦〉における登戸研究所と中野学校の役割

1 〈秘密戦〉とは何か

- [1] 戦争には必ず付随するが、歴史に記録されない〈裏側の戦争〉
- [2] 戦時に限らず、平時においても密かに行われている〈水面下の戦争〉
- [3] 〈秘密戦〉の4つ要素：防諜・諜報・謀略・宣伝（戦時プロパガンダ）
（これらのうち防諜・諜報・宣伝は〈情報戦〉とくくることができる）

2 陸軍登戸研究所：日本陸軍における〈秘密戦〉兵器・資材の専門開発機関

- 1927年：陸軍科学研究所秘密戦資材研究室（篠田研究室）設置
- 1937年：陸軍科学研究所登戸実験場（電波兵器研究）設置
- 1939年9月：陸軍科学研究所登戸出張所（電波兵器と「特殊科学材料」研究）
第一科（電波兵器）
第二科（毒物・薬物・生物化学兵器・スパイ用品）・第三科（偽札）が増設される

1942年10月：第九陸軍技術研究所 第一科で風船爆弾研究・開発

1945年5月：本土決戦にそなえ長野県伊那地方等に分散移転

3 陸軍中野学校：日本陸軍における〈秘密戦〉要員の専門育成機関

- 1938年1月：後方勤務要員養成所設置（第1期生19名採用、九段・愛国婦人会別館）
- 1939年4月：中野の旧電信隊跡（現・JR中野駅北側）に移転
- 1940年8月：陸軍中野学校と改称（1944年8月には静岡県磐田郡に二俣分校設置）
- 1945年4月：本土決戦にそなえ群馬県富岡町に移転
- 1938～1945年：2,131名が卒業（戦死289名・不明376名）

4 〈秘密戦〉の担い手たち

- [1] 陸軍登戸研究所と陸軍中野学校（ともに参謀本部第8課＝謀略課の指揮下）
- [2] 関東軍情報部（1940年4月創設、本部：ハルビン特務機関）
登戸研究所で開発した軍用犬追跡防避剤（え号剤）を実験、警戒犬突破方法の研究
- [3] 憲兵隊
憲兵学校には『秘密戦関係』と題するテキストがあった

II 日本軍の〈秘密戦〉の歴史

1 日清・日露戦争期

- [1] 参謀本部直属のスパイ・情報収集者を朝鮮半島や大陸に派遣
- [2] 日露戦争～シベリア出兵期のスパイ（代表例：石光真清）
→ 一般人（商人・僧侶など）に変装して情報収集や工作にあたる

- [3] 日露戦争の情報収集・謀略（代表例：明石元二郎）
 - スtockホルムなどを拠点に軍事情報の収集、ポーランド独立派等に武器・資金援助
- [4] 中国大陸における特務機関（諜報・謀略機関）の原形となる

2 第1次世界大戦（1914-18年）期

- [1] 第1次世界大戦を境に科学技術を応用した〈秘密戦〉が欧米で発達
 - 暗号・通信傍受（盗聴）・秘密撮影・宣伝（戦時プロパガンダ）など
- [2] ワシントン会議（1921-22年）の際に日本側はこの分野の立ち遅れを痛感
 - 陸軍科学研究所秘密戦資材研究室の設置（1927年）

3 満州事変期（1931年9月～）

- [1] 満洲事変と国際的孤立
- [2] ドイツ再軍備（1935年）・軍縮条約失効（1936年12月末）にともなう世界的な軍拡競争
 - 世界的に〈秘密戦〉が活発化

4 日中戦争期（1937年7月～）

- [1] 対中国だけでなく対欧米〈秘密戦〉が活発に
 - 中国を支援する英・米・仏・ソ連に対する防諜・諜報戦（上海・香港などが舞台に）
- [2] 参謀本部第2部第8課（大本営謀略課）の設置（1937年11月：課長・影佐禎昭大佐）
 - 中野学校と登戸研究所を実質的に指揮する中枢の成立
 - 秋草俊・福本亀治・岩畔豪雄らの主導で後方勤務要員養成所設置（1938年1月）
- [3] 憲兵・特務機関を中心とした〈秘密戦〉の遂行
 - 登戸研究所（陸軍科学研究所登戸出張所）の機能強化（1939年～） → 三科体制に
 - 中国に対する通貨謀略戦（偽札散布）も実施（1939年～）

5 第2次世界大戦期（1939年9月～1945年）

- [1] 日ソ関係の緊張にともなう〈秘密戦〉
 - 通信諜報の発達、白系ロシア人・朝鮮族をスパイとして潜入させる
- [2] 日独伊三国同盟の締結（1940年9月）、対英米関係の緊張にともなう〈秘密戦〉
 - アジア諸国・地域別の〈秘密戦〉の展開（1940年8月：陸軍中野学校設置）
 - アジア太平洋戦争開戦前から北米・アジア・太平洋各地にスパイ配置
- [3] アジア太平洋戦争にともなう〈秘密戦〉
 - 陸海軍は在米日系人にまぎれこませてスパイを潜入させる（日系人隔離でスパイ網壊滅）
 - 外務省は中立国人を雇ってアメリカに潜入させた（東工作）

III アジア太平洋戦争末期の〈秘密戦〉

1 潜入・残置工作員の配置（中野学校出身者）

- [1] 対インド工作
 - 開戦前・緒戦期：第25軍のF機関（藤原岩市少佐）が担当、インド国民軍を組織
 - 岩畔機関（岩畔豪雄大佐）の設置（1942年3月）
- インド独立連盟本部（バンコク）、インド国民軍司令部（シンガポール）、闘士養成学校（スワラジ学院）、対インド宣伝ラジオ放送、インド人工作員のインド潜入
- 独立連盟幹部と国民軍幹部との内紛、ビハリ・ボースと現地インド人との対立
- 光機関（山本敏大佐）の設置（1943年3月）
- チャンドラボース来日（5月）、自由インド仮政府樹立（10月）、自由インド国民軍最高指揮官にインパール作戦（1944年3月～7月）に呼応してインド国民軍も進攻、工作員潜入

[2] 残置工作員の配置 (1944年～)

日本軍後退に対応して、後方攪乱・連絡のためにビルマ、フィリピン、中国、太平洋の島々に残置工作員を配置 (主に中野学校出身者)

2 沖縄における〈秘密戦〉

[1] 第32軍 (沖縄守備軍) の新設 (1944年3月22日) と急激な増強 (7月～9月)

[2] 沖縄本島に2個 (当初は3個) 師団+1個混成旅団を配置

第62師団・第24師団・独立混成第44旅団

独混44旅団の第2歩兵隊 (宇土武彦大佐) = 「国頭支隊」

→ 沖縄本島北部の国頭地区で〈秘密戦〉・遊撃戦を担当

→ 米軍上陸後、遊撃戦を展開 (防諜作戦として一般住民をも殺傷: 大宜味村渡野喜屋)

IV 本土決戦と〈秘密戦〉

1 本土防衛から本土決戦に

[1] 本土での「決戦」構想の出現

サイパン陥落直後の「陸海軍爾後ノ作戦指導大綱」(1944.7.21)

→ 本土での「決戦」を一つの選択肢として決定

→ その他に比島方面、「連絡圏域」=沖縄・台湾方面、千島・北海道方面での「決戦」を想定

→ 1944.10を目途として「決戦準備ヲ概成スル」とした

[2] 本土での作戦準備進捗せず

南方資源地帯から日本本土への海上輸送路が脅かされ、本土の物資不足深刻に

東部軍司令部は10.13にようやく沿岸築城 (砲台・レーダー基地) の開始を命令

[3] 例外的に進展した部門

「松代大本営」建設工事

「風船爆弾」の開発と実戦投入 (当初は生物兵器=牛疫ウイルス搭載を予定)

→ ただし、「風船爆弾」は〈決戦兵器〉ではなく、後方攪乱のための〈謀略兵器〉

[4] 「レイテ決戦」(捷一号作戦) の発動 (10.18) により、〈本土決戦〉準備はさらに遅延

2 本土決戦準備の本格化

[1] 「レイテ決戦」断念後、〈本土決戦〉準備は本格化

「帝国陸海軍作戦計画大綱」(1945.1.20)

「皇土特ニ本土及朝鮮ノ作戦準備」を「本年初秋迄ニ概成ス」と決定

[2] 本土決戦作戦計画の策定

大本営陸軍部「国土築城実施要綱」発令 (3.16)

→ 1945.7までの全陣地の骨格完成、1945.10までの完成を命ずる

大本営陸軍部「決号作戦準備要綱」発令 (4.8)

[3] 本土決戦のための兵力総動員

敗戦時、陸軍は内地・朝鮮に294万の兵力を展開

→ 新たに150万人を徴集・召集して部隊を編成 (装備劣悪・練度も低い)

→ 内陸防御作戦から次第に水際防御作戦へと逆戻り (第一線部隊は水際で「玉砕」想定)

→ 総司令部 (大本営) のみ松代へ後退

[4] 本土決戦の労働力・補助兵力総動員

義勇兵役法の公布 (6.23): 国民義勇隊・国民義勇戦闘隊の組織

3 本土決戦準備の実態

- [1] 特攻兵器の生産と出撃基地（沿岸部）の建設 → 「震洋」「回天」「伏龍」など
- [2] 作戦用道路・飛行場の建設 → 関東地区「リ号演習」
- [3] 沿岸部での陣地構築
- [4] 軍司令部機能・軍需工場の内陸部移転

→ 特に長野県・群馬県

陸軍登戸研究所などの「秘密戦」研究部門、中野学校など「秘密戦」実施部門も

4 決戦準備と〈秘密戦〉関係諸機関の疎開・移転

- [1] 登戸研究所の疎開（1944年末～1945年5月）

電波兵器（レーダー）関係 → 多摩陸軍技術研究所（多摩研）に統合

本部・第二科・第四科 → 長野県の伊那郡（現・駒ヶ根市）

第一科（電波兵器）→ 長野県北安曇郡・兵庫県（関西分廠）

第三科（偽札）→ 福井県武生（和紙製造）、印刷工場は登戸に残る

- [2] 陸軍中野学校

教育の重点を遊撃戦研究に（1943年8月～）

静岡県二俣町（現・天竜市）に二俣分教場（分校）を開設、遊撃戦幹部の養成（1944年8月～）

本部も群馬県富岡に疎開（1945年3月）

5 本土での〈秘密戦〉の準備

- [1] 遊撃戦の準備：『遊撃戦戦闘教令（案）』の作成

→ 敵中潜入・奇襲・陽動・謀略工作・後方攪乱などを主たる目的

薬物・細菌・時限爆弾（焼夷弾）などの使用

- [2] 登戸研究所における遊撃戦準備

第二科・第四科では、遊撃戦用の簡便な携帯兵器の開発・製造

末期における重点開発課題：

◎研う：何にでも充填できる粘土状の爆薬

◎マルケ：熱線（赤外線）誘導式の爆弾

◎く号：怪力光線・怪力電波

◎細菌兵器

大量の石井式濾過器濾過筒を伊那地区に搬入 → 細菌戦の準備か

- [3] 登戸研究所（研究開発）と中野学校（人材養成）の融合

→ 本土決戦に際しては、〈秘密戦〉関係機関は、地理的にも接近し、開発・製造・実戦が融合する体制になりつつあった。

登戸研究所が北安曇・伊那、中野学校が二俣・富岡 → いずれも松代を防衛する拠点

おわりに

- [1] 戦争・〈秘密戦〉の記憶を残す重要性
- [2] 明治大学中野・生田キャンパスで戦争を語り継ぐ意義

【参考文献】

- [1] 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年、新装版2010年）
- [2] 海野福寿ほか編『陸軍登戸研究所—隠蔽された謀略秘密兵器開発—』（青木書店、2003年）
- [3] 山田朗・渡辺賢二・齋藤一晴『登戸研究所から考える戦争と平和』（芙蓉書房出版、2011年）
- [4] 渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館、2012年）
- [5] 山田朗・明治大学平和教育登戸研究所資料館編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012年）